

松 山 大 学 論 集  
第 22 卷 第 6 号 抜 刷  
2 0 1 1 年 2 月 発 行

『シャーリー』は本当に失敗作か  
—— シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢(2) ——

新 井 英 夫

# 『シャーリー』は本当に失敗作か

—— シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢(2) ——

新 井 英 夫

## Ⅲ

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) は『シャーリー』(Shirley, 1849) 執筆当時、女性問題について関心を持っていた。1848年5月12日付の W. S. ウィリアムズ (W. S. Williams, 1800-1875) 宛の手紙において、彼女は次のように述べている。

I often wish to say something about the ‘condition of women’ question, . . . I conceive that when patience has done its utmost and industry its best, whether in the case of women or operatives, and when both are baffled, and pain and want triumph, the sufferer is free, is entitled, at last to send up to Heaven any piercing cry for relief, if by that cry he can hope to obtain succor.<sup>1)</sup>

シャーロットは労働者と女性の現状に関心を寄せ、彼らが忍耐の限界を超えた苦しみから救われたいと願うのは当然であるという深い同情を示している。ここでシャーロットが労働者と女性をともに社会から抑圧され虐げられた存在として捉え、労働問題と女性問題を同列に扱っていることが窺える。この考えは、『シャーリー』において、キャロライン・ヘルストーン (Caroline Helstone) がロバート・ムア (Robert Gérard Moore) と結婚できる見通しがなくなり、「おそらく70歳まで生きなければならない。半世紀の生活が待っているのだ。ど

のようにして過ごそうか。私と墓場の間に横たわっている時間を満たすために何をしようか<sup>2)</sup>と、一人で生きていかなければならない孤独な独身生活を憂いているとき、労働者の置かれた立場も、女性の置かれた立場と同じであるとして、個人の力では動かし得ない社会悪について述べている次の引用に具現化されている。

People hate to be reminded of ills they are unable or unwilling to remedy: such reminder, in forcing on them a sense of their own incapacity, or a more painful sense of an obligation to make some unpleasant effort, troubles their ease and shakes their self-complacency. Old maids, like the houseless and unemployed poor, should not ask for a place and an occupation in the world: the demand disturbs the happy and rich: it disturbs parents. Look at the numerous families of girls in this neighbourhood: the Armitages, the Birtwistles, the Sykes. The brothers of these girls are every one in business or in professions; they have something to do: their sisters have no earthly employment, but household work and sewing; no earthly pleasure, but an unprofitable visiting; and no hope, in all their life to come, of anything better.(369-370)

このキャララインの絶望の言葉からも明らかなように、『シャーリー』では結婚のうちにしか到達点を見出すことができない19世紀中産階級の「女性の状況の問題」(‘condition of women’ question)こそ、作者シャーロット・ブロンテが扱おうとしたもう一つの主題なのである。つまり『シャーリー』においてシャーロットは、「月曜日の朝」のような単調な現実にはヒロインを据え置くことで、当時の女性の苦悩の原因を探り、それを改善する方策を導き出そうとしているのである。

キャララインは、シャーロットのほかの小説の主人公とは異なり、完全な孤児ではないが、幼いときに父を亡くし、母は生き別れて消息不明であったた

め、叔父のマシューソン・ヘルストン (Matthewson Helstone) 牧師と一緒に暮らしている。彼はジェイン・エア (Jane Eyre) を迫害したリード夫人 (Mrs Sarah Reed) のように冷酷残忍な人物ではないが、熱烈なトーリー党支持者であり、労働者の暴動には武力で対抗し、彼らにいっさいの同情を示さず、また彼らの実情を理解しようとしないうる冷酷な人物である。したがって彼は労働者と同様に社会的に弱い立場に身を置く女性の実情も当然理解しようとしないうる。彼は表面的には女性に対して愛想よく振る舞うが、心の底では女性は男性より劣った愚かな存在であり、またそうであってもらいたいと考えている。

At heart he could not abide sense in women. He liked to see them as silly, as light-headed, as vain, as open to ridicule as possible, because they were then in reality what he held them to be, and wished them to be – inferior, toys to play with, to amuse a vacant hour, and to be thrown away. (112)

当然、ヘルストン牧師はキャロラインに対しても「針にしがみつき、シャツやガウンを縫うとか、パイの皮づくりを習う」ことが「賢い女」(95)になる条件であることを説き、強要している。このような考え方は、当時の家父長制社会の一般的な男性による女性観を反映したものであり、彼が特別な存在であるわけではない。キャロラインとシャーリー (Shirley Keelder) のヒーロとなるロバートとルイ (Louis Gérard Moore) でさえ、女性が男性よりも劣った愚かな存在であると考えている。

キャロラインが愛する男性ロバート・ムアは、地主のシャーリー・キールダーから谷間にある紡績工場を借り受け、最新の機械を導入して、利益を上げようとする急進的な工場経営者である。彼は労働者の苦しみに対して全く無関心であり、「新しく発明された機械が昔からいた労働者の職を奪うことになったときにも、十分な心配りをせず、自分が毎週の賃金を支払うのをやめた当の相手が、どこで日々のパンを見つけますか」(29) など、一度も自問したことが

なかった。さらにウィリアム・ファレン (William Farren) が機械類はもっとゆるやかに導入したらどうでしょうかと穏やかに提案しているにもかかわらず、ロバートは自分の方が階級が上であることを露骨に表に出し、「お前の指図にも、他の誰の指図にも従いはしない。これ以上機械のことは言うな。俺は俺のやり方を貫き通す」(133) と、相手の立場を考慮することなく、傲慢且つ冷酷な態度で接している。このような労働者に対する態度は、同時に女性に対する彼の態度にも表れている。

‘ . . . these ridiculous gossips of Whinbury and Briarfield will keep pestering one about being married! As if there was nothing to be done in life but to “pay attention,” as they say to some young lady, and then to go to church with her, and then to start on a bridal tour and then to run through a round of visits, and then, I suppose, to be “having a family.” Oh, que le diable emporte!’ He broke off the aspiration into which he was launching with a certain energy, and added, more calmly, ‘I believe women talk and think only of these things, and they naturally fancy men’s minds similarly occupied.’ (25)

ロバートは女性は結婚や子供のことなど低次元のことにしか関心がないと考え、女性を視野の狭い劣った存在とみなしている。このように女性蔑視の考えを持つロバートは、自分の工場の経営の障害になると考えるとすぐにキャロラインを捨て、財産目当てのために平気でシャーリーに求婚する傲慢な男性として描かれている。労働者に傲慢であるロバートは、女性に対しても傲慢な存在として描かれているのである。

シャーリーが愛する男性ルイ・ムアは家庭教師であり、兄ロバートとは異なり、家父長制社会の外側にいるアウト・サイダーとして描かれている。家庭教師の身分は階級制度の厳しかったイギリスにあって、富裕階級の人々の子どもの教育を担当していたが、それ以外はその家の添え物のような存在にすぎな

かった。事実シャーリーも初めはルイを「単なる教師」としか考えず、「一人の紳士、一人の男」とは認めず、「彼の存在に気付いた素振り」(424)を見せることすらなかった。ルイは家庭教師という孤独且つ屈辱的な境遇に耐え忍ぶ人物として描かれている。しかしルイは狂犬病に罹ったのではないかと心配するシャーリーに、そうした心配は無用であることを諭すあたりから、「一人の紳士、一人の男」としての自信を取り戻し、女性に対して権力を行使したいという欲求に駆られるようになる。

It was unutterably sweet to feel myself at once near her [Shirley] and above her: to be conscious of a natural right and power to sustain her, as a husband should sustain his wife. . . . It is her faults, or at least her foibles, that bring her near to me – that nestle her to my heart – that fold her about with my love – and that for a most selfish, but deeply-natural reason; these faults are the steps by which I mount to ascendancy over her. (488)

ルイは自分より劣った存在であることを認識することができて初めて、女性を愛することができるようになるのだ。結婚後、シャーリーになりかわりルイは自らの権力を行使し、資本家として辣腕を振るうようになる。このような社会的地位を手に入れたルイは、家庭教師というアウト・サイダーの立場から、ロバートと同じ家父長制社会の枠組みに入り、「女性は男性に支配されるもの」という家父長的女性観を持つようになるのである。

このような家父長的女性観に反発を持っていたシャーロットは、すでに前作『ジェイン・エア』において、主人公ジェイン・エアを通して、次のように抗議の声を上げていた。

It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquillity: they must have action; and they will make it if they cannot find it. . . . Women are

supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts, as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex.<sup>3)</sup>

『ジェイン・エア』の第12章において、ジェインは社会における女性の立場について、明確に自分の意見を述べ、男女平等と女性の社会進出の必要性を訴えている。このような主張は、家父長制が徹底され、男女の役割の違いが歴然としていた時代において画期的であることはもちろんのこと、その主張が女性主人公によって感情的且つ怒りに満ち溢れた状態で為されていることは、まさに革命的とさえ言える<sup>4)</sup>。同様に『シャーリー』においても、シャーロットはキャロライン・ヘルストンを通して、女性を取り巻く不当な状況を嘆き、批判の声を上げ、女性の自立と尊厳を訴える激しい感情を前面に表している。ジェインは家父長制がもたらす数々の危険に遭遇し、しかもそれを乗り越えなければならなかったが、それと同じくキャロラインも苦難の真の原因は女性の隷属的な地位にある<sup>5)</sup>。

The great wish – the sole aim of every one of them is to be married. . . . They scheme, they plot, they dress to ensnare husbands. . . . Men of England! look at your poor girls, many of them fading round you, dropping off in consumption or decline; or, what is worse, degenerating to sour old maids, – envious, backbiting, wretched, because life is a desert to them: or, what is worst of all, reduced to strive, by scarce modest coquetry and debasing artifice, to gain that

position and consideration by marriage which to celibacy is denied. . . .  
cultivate them [your girl] – give them scope and work.(370-371)

確かにこの場面においてキャロラインは、多くの若い女性が結婚というただ一つのことを目的にしていると痛烈な批判を繰り返すとともに、女性は自らの才能を育み、自由と仕事を得るべきであると主張している。さらにロバートの工場監督を務めているジョー・スコット (Joe Scott) が聖書の「テモテへの第一の手紙」(1 Timothy) を引用し男性の優位性を説いている場面<sup>6)</sup>において、キャロラインは「もしギリシャ語の原文が読めたら、たぶんたくさんの言葉が間違っ て解釈されて、誤読されていることに気づくでしょう」と反論し、むしろ正しい解釈は「女も異議を唱えるべきだと思えるときには、いつも唱えるべきである」(312) と、ジェインに負けることのない激しい主張をしている。しかしながらジェインとは異なり、本来キャロラインは白いモスリンの清楚なドレスが似合う「家庭の天使」像を具現化したような女性であり、ヘルストン牧師が彼女に対して「針にしがみつき、シャツやガウンを縫うとか、パイの皮づくりを習う」ことが「賢い女」(95) になる条件であることを説いたとき、彼女は何も反論しない従順な女性として描かれている。ジェインが常に自由を求めゲイツヘッド (Gateshead), ローウッド (Lowood), ソーンフィールド (Thornfield), マーシュ・エンド (Marsh End), ファーンディーン (Ferndean) と旅をし、“dependant” の状態から “independent” の状態に、そして “discord” から “concord” の状態に成長すべく、その目標に向かって一歩ずつ着実に歩み続ける行動力溢れる女性として描かれている<sup>7)</sup> ことと比べ、キャロラインはヨークシャーから一歩も離れず、何も行動することなく最終的に家父長的な女性観を持つロバート・ムアと結婚してしまうのである。このためジェインと同じような家父長的な結婚観に対する激しい批判の言葉がキャロラインの口から発せられることに違和感を覚えざるを得ない。またこの発言は、ロバートに対する恋心が報われず彼との結婚の見通しがなくなった絶望的な状態で為された



ものであることから、キャロラインの本心から発せられた言葉とは到底思えない。作者自身がこの小説の執筆当時の女性の置かれていた立場に憤りを感じ、登場人物の枠を超えてキャロラインに激しい発言をさせたために、キャロラインの人物造形に矛盾を生む結果になったのであろう。

『シャーリー』のもう一人のヒロインであるシャーリー・キールダーは、あらゆる点でキャロラインとは対照的な役割を果たしている。彼女は他人に頼って生きている居候的存在ではないし、いつも受身の哀れみを乞う女性でもなく、家政婦でも主婦でもない。彼女は年収1,000ポンドの土地の相続者として、この地方の実業家たちの上に君臨し、治安判事と民兵隊の隊長といった権力を手にしている。ある意味男性と同じような活躍ができる立場にあり、またそれだけの気性の強さも与えられ、大人しく無力な居候のキャロラインとは正反対の立場にいる。そもそも彼女の名前は、息子を望んでいた両親が男の子用に用意していた名前であり、男女のどちらとも判断のつかない名前である。つまり、彼女は生まれながらに「女性の状況」を超越した存在として描かれているのである。したがって当然シャーリーは、家父長的女性観に反発する。シャーリーはミルトン (John Milton, 1608-1674) の『失樂園』 (*Paradise Lost*, 1667) を引き合いに出し、キャロラインに「地上に最初に現れたのは巨人たちで、イヴはその母親だったの」(303) とミルトンのイヴ観を退け、イヴこそ「墮落することを知らない」存在であり、「全能の神とも競うことのできる」(303) 巨人たちを生み出した母であり、「万物の中心」(454) であると主張している。つまり、アダムの肋骨からイヴが誕生したというこれまでの伝統的な聖書の解釈とは異なり、女性が男性の下にではなく、上に位置すべき存在であると主張しているのである<sup>8)</sup>。このような男女平等論以上に過激な母権的主張を口にするシャーリーだが、理想的な男性について語るときはこれと正反対の主張をしている。

“... when they are good, they are the lords of the creation, – they are the sons

of God. Moulded in their Maker's image, the minutest spark of His spirit lifts them almost above mortality. Indisputably, a great, good, handsome man is the first of created things. . . . Nothing ever charms me more than when I meet my superior – one who makes me sincerely feel that he is my superior. . . . I should be glad to see him any day: the higher above me, so much the better: it degrades to stoop – it is glorious to look up. . . . (206)

シャーリーは理想的な男性は女性以上の存在であると考え、自分より優れた男性と出会うことを願っている。これは「テモテへの第一の手紙」を引用して男性の優位性を説いたジョー・スコットの考えと全く同じであり、ミルトンのイヴ観を退けるほどの母権論者であるシャーリーの言葉と矛盾している。さらに彼女は中産階級の女性が毎日の生活において専念すべきであるとされていた調理と食事の指示という伝統的な性の役割さえ主体的にこなしているのである。例えば、谷間の工場襲撃事件の後で、シャーリーはロバートから仲間たちに簡単な食事を出してくれるようにと頼まれると、あれだけ男性的な役割を意識して行動し、家父長的女性観を嫌悪していたにもかかわらず、彼女はロボートの頼みに何の抵抗も見せることなく快諾している。シャーリーは食料品室と酒蔵にあるものを全て谷間へ運ばせ、そのあとで召使たちに「家にパンや肉があまりなかったら、肉屋とパン屋に行って、あるだけ送って頂戴」(339)と、男性のために食事の指示をしている。これはヴィクトリア朝の女性が求められた役割に一致しており、シャーリーが伝統的な女性の枠組みのなかに存在していることを明らかにしているのである。このような発言と行動の矛盾は、彼女が最終的に家父長的女性観を当然視するルイ・ムアに「私を導いて下さい。私は従います」(587)と言って、喜んで結婚する場面に収斂されている。

このように『シャーリー』は、当時の女性の生き方に関する問題を提起しながら、結末ではこの社会問題を提起したヒロイン自身が2人とも結婚という家父長的な枠組みに収まってしまい、労働問題と同様に女性問題についても何も

解決策を読者に提示せずに幕を閉じてしまうのである。G. H. ルイスらの指摘を受け、リアリズムを基調とした小説として執筆された『シャーリー』において、2人のヒロインによる家父長的結婚制度に対する批判や母権の主張は、あまりにも現実と乖離したものであり、その批判や主張を叶える形で幕を閉じることはどうしてもできなかつたのであろう。確かに読者は2人のヒロインが何も解決することなく結婚という枠組みに収まることに釈然としない思いを持つことだろう。しかしこのような釈然としない思いを抱かせることで、当時の女性問題の根深さを読者に印象付けることができるのであり、その意味でリアリズム小説として『シャーリー』は一定の成果を収めていると評価できるのではないだろうか。

#### IV

これまで論じてきたように、労働問題と女性問題について『シャーリー』は問題提起をしながら、明確な解答を提示していない。その意味で「全てを次々に試みては放棄」<sup>9)</sup>していると述べたG. H. ルイス (George Henry Lewes, 1817-1878) の主張は正しいといえるが、これは小説技法上の欠点とみなすよりもむしろ、作家シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢と関係があると解釈できるのではないだろうか。

『ジェイン・エア』第12章において、ジェインは社会における女性の立場について、明確に自分の意見を述べ、男女平等と女性の社会進出の必要性を訴えている。しかし最終章においてジェインはロチェスター (Monsieur Edouard Fairfax de Rochester) と結婚し、愛情深い献身的な妻になっている。これは『シャーリー』において、キャロラインとシャーリーが家父長的女性観に対する批判や母権の主張を試みながら、最終的に家父長的結婚制度の枠内に収まってしまふことと全く同じである。

There was a pleasure in my services, most full, most exquisite, even though

sad – because he claimed these services without painful shame or damping humiliation. He loved me so truly, that he knew no reluctance in profiting by my attendance: he felt I loved him so fondly, that to yield that attendance was to indulge my sweetest wishes.<sup>10)</sup>

テリー・イーグルトン (Terry Eagleton, 1943-) が指摘しているように、「奉仕」には主従の関係を読み取ることができる<sup>11)</sup> ジェインが求めていたのは社会的活動であり、男性への隷属ではない。ジェインは男女は神の前に平等であり、女性も男性と同じように才能を発揮し努力をする社会的活躍の場が必要だと主張していた。しかし結婚という結末は、この主張に対して何の解決策も提示したことにならず、責任を果たしていないばかりか、反対にヴィクトリア朝時代の家父長的価値観をジェインが容認してしまっていることを表している。フェミニズム思想を高らかに謳いあげ、当時の女性観に問題を提起したジェインとは別人のジェインであるかのような印象さえ受ける。もし盲目のロチェスターを介護するために社会活動を続けることができないのならば、その葛藤を語る責任がジェインにはあるはずです。しかし彼女はその責任を果たさず、「私は最高に幸せ、言葉で語り尽くせぬほど幸せな人間だと思っています」<sup>12)</sup> と、結婚生活の幸せを一方向的に述べるだけなのである。このように『ジェイン・エア』で提示された女性問題は、結末において全て「暗闇」に葬られているのである。シャーロットがフェミニズムの思想を高らかに謳いあげることが目的としたのではないことは、彼女が男女平等と女性解放の主張を貫いていないことから明らかである。シャーロットの目的は、むしろこうした主張を貫くことができず、無意識的に因習的枠組みに収まってしまふ女性を描くことにあったのではないだろうか。

『シャーリー』は『ジェイン・エア』と同様、登場人物の言動が矛盾に満ちている。これはシャーロットの小説のなかで決して『シャーリー』だけが小説としての統一性を欠いているのではないことを明らかにすると同時に、このよ

うな手法自体が彼女の狙いであることを明らかにしている。シャーロットは言動に矛盾を抱えた女性を描くことで、当時の家父長的女性観がいかにかし難い思想であるかを浮き上がらせ、そこにこそ問題があるのだということを読者に示そうとしているのである。

このような明確な社会問題に対する解答を示さず、読者に開かれた形で問題を提起するシャーロットの慎重な姿勢は、1850年8月27日付のエリザベス・ギヤスケル宛に書かれた手紙のなかで次のように述べられている。

Men begin to regard the position of woman in another light than they used to do; and a few men, whose sympathies are fine and whose sense of justice is strong, think and speak of it with a candour that commands my admiration. They say, however – and, to an extent, truly – that the amelioration of our condition depends on ourselves. Certainly there are evils which our own efforts will best reach; but as certainly there are other evils – deep-rooted in the foundations of the social system – which no efforts of ours can touch; of which we cannot complain; of which it is advisable not too often to think.<sup>13)</sup>

つまりシャーロットは大きな社会問題に対して常に明確な解答を出そうとしていたわけではなく、それどころか、そのような明確な解答を求めることの不可能性を見抜いているのである。

『シャーリー』において、個人では解決することができない社会問題に対して作者シャーロット・ブロンテが取った姿勢は、解決法を読者に提示することではなく、社会問題に対峙する個人を描くことであつた。それは戦争の終結によってしか事態を好転させることが出来なかつたとはいえ、小説を通して一貫して工場の経営改善に奮闘しているロバート・ムアの姿が描かれていること、最終的に結婚するしかなかつたにせよ女性の生き方を模索し続けているキャロラインとシャーリーの姿が描かれていることに表れている。さらにシャーロッ

トは、『シャーリー』において全知的話法を用いているにもかかわらず、当事者のうちの一方の視点からしか読者に眺めることを許さなかったり、登場人物を矛盾を抱えたままの状態にしておいたりすることによって、逆説的に社会問題を浮かび上がらせている。労働問題は、労働者たちを描かないからこそ、女性問題は結婚に否定的な主張が為されておきながらヒロインが結婚制度内に収まってしまうからこそ、それぞれの社会問題の根深さが際立つのである。社会問題に対して安易に解決を提示することなく、その問題に対峙する個人を描こうとする試みこそ作家シャーロット・ブロンテの社会問題に対する姿勢であり、『シャーリー』においても一定の効果を生んでいるのである。確かにプライア夫人をめぐる挿話の不自然さや、脇役たちの不必要に長い会話、無用な語り手のコメント、主人公の一人であるシャーリー・キールダーが小説の3分の1を過ぎるまで登場しないことなどを含め、この小説は欠陥だらけであり、その意味では失敗作と言わざるを得ない。しかしそれを認めたくえでなお、この小説はシャーロットがあえて自分本来の領域を離れてまで現実の社会問題に目を向け、近代社会に対する鋭い問題提起を行ったことは十分に評価されるべきである。また労働者と女性を等しく社会の犠牲者とする見方は、彼女独自の問題意識といえる。そして何よりも女性問題に本格的に取り組んだ先駆的小説として、評価することができる。

## 註

- 1) Thomas James Wise and John Alexander Symington, eds., *The Brontës: Their Lives, Friendship Correspondence, 4 volumes* (Pennsylvania: Porcupine Press, 1980) II, 216.
- 2) Charlotte Brontë, *Shirley*, ed. Jessica Cox (London: Penguin, 2006) 168. 以後、本論文中の括弧内の数字は、このテキストの頁数を示すものとする。
- 3) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, ed. Michael Mason (Harmondsworth: Penguin, 1996) 125-126.
- 4) このフェミニズム宣言ともいえるジェインの主張は、エリザベス・ボウエン (Elizabeth Bowen, 1899-1973) やフィリス・ベントレー (Phyllis Bentley, 1897-1977) らによって、イギリス文学史上最初のフェミニズム小説として位置づけられた大きな要因となっている。

- Cf. Elizabeth Bowen, *English Novelists* (London: William Collins, 1942) 34. Phyllis Bentley, “Jane Eyre” in *The Brontës* (London: Home & Van Thal Ltd., 1947) 68.
- 5) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Women Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale UP, 2000) 380.
- 6) ジョーは “Let the woman learn in silence, with all subjection. I suffer not a woman to teach, nor to usurp authority over the man; but to be in silence. For Adam was first formed, then Eve” (311) という「テモテへ第一の手紙」(1 Timothy 2: 11-14) を引用し、女性は黙って男性に従うべきであるとシャーリーに説いている。
- 7) ジェインは、ジョン・リード (John Reed) に “you are a dependant” (17) と呼ばれていたこと、また “I was a discord in Gateshead Hall” (23) という自己分析を通し、自らの置かれていた境遇を読者に示している。さらに対照的境遇として小説後半部で “I am an independent woman now” (483) であり, “perfect concord is the result” (712) であると述べることで、自らの成長過程を読者に印象付けている。Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, 17, 23, 483, 712.
- 8) ‘To whom thus Eve with perfect beauty adorned.  
 ‘My author and disposer, what thou bidst  
 ‘Unargued I obey; so God ordains,  
 ‘God is thy law, thou mine: to know no more  
 ‘Is woman’s happiest knowledge and her praise.’  
 ミルトンは『失楽園』のなかで、出すぎたことをせず余計な知識を持たないで男性に従うことが女性の幸せになると指摘している。Cf. John Milton, *Paradise lost*, ed. Alastair Fowler (London: Longman, 1998) 257-258.
- 9) Miriam Allott, ed. *The Brontës: The Critical Heritage* (London: Routledge, 2003) 163-165.
- 10) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, 500.
- 11) Terry Eagleton, *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës* (Macmillan, 1988) 29.
- 12) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, 500.
- 13) Wise and Symington, III, 150.

### 参 考 文 献

- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1994.
- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Chicago: Chicago UP, 1983.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Harmondsworth: Penguin, 1948.
- Ewbank, Inga-Stina. *Their Proper Sphere. A Study of the Brontë Sisters as Early Victorian Female Novelists*. London: Edward Arnold, 1966.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Ed. Macdonald Daly. London: Penguin, 2003.
- . *The Life of Charlotte Brontë*. Ed. Alan Shelston. Harmondsworth: Penguin, 1975.

- Gren, Heather. *Charlotte Brontë: The Imagination in History*. New York: Oxford UP, 2002.
- Ingham, Patricia. *The Brontës*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Knies, Earl A. *The Art of Charlotte Brontë*. Athens: Ohio UP, 1969.
- Korg, Jacob. "The Problem of Unity in *Shirley*." McNeese 488-496.
- McNeese, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 3. Mountfield: Helm Information, 1996.
- Moglen, Helen. *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. Madison: Wisconsin UP, 1984.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Simon & Schuster, 1993.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Charlotte Brontë to Doris Lessing*. New York: Princeton UP, 1997.
- Spens, Janet. "Charlotte Brontë." *Essays and Studies by Members of the English Association*, XIV. 1929.
- Tompkins, J. M. S. "Caroline Helstone's Eyes." *Brontë Society Transactions*, XIV. 1961.
- Tromly, Annette. *The Cover of the Mask: the Autobiographers in Charlotte Brontë's Fiction*. Victoria, B. C.: English Literary Studies, Victoria UP, 1982.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan, 1984.